

せだかむい

発行・古平町史編集委員会
編集・古平町史編纂室
第四十四号（一日発行）
平成五年五月一日

北海の古平風土物語 (十)

阿波萬先生をしのんで

高橋 源 五口

このころ、町はずれに（今の浜町中央通り）「山の神」の神社があった。社主の福島おきはあさんは、津軽から移住して来た人で、神おろしや、仏おろし、つきもの払いをする。いたこさんでもあった。

この山の神と道路を挟んだ斜め向かいに久印長尾さんの家があった。母さんはいつも汗を拭き拭き「南部ごま塩せんべい」を焼いていた。なかなかうまいせんべいだと評判でよく売れていた。そこのたまさんは私と同級生で、ときどき変形したせんべいや欠けたせんべいを貰っては、学校の帰り道かじって歩いたことを思い出す。

久印の横に部落会の公德傘が置いてあって、急な雨の時にはその公德傘を借りて帰ることが

あった。

× × ×

久印せんべいの向い側に、阿波萬先生のお宅があった。おじいさんはひげの白くなりかけた人で、字の書けない人に代わって手紙などを書く奉仕をしていた。書役さんと言われていた。

息子である萬先生は、明治四十四年に札幌師範学校を卒業、母校でもある古平小学校に勤務していた。長兄（小野寺地作）の担任であったが、卒業してからもずうっと友達と阿波先生の家に「夜学」だといって通っていた。

家の仕事が終わって夕飯後になると、習字の道具や算盤、分厚い辞書や本などを風呂敷に包んで出かけ、毎夜遅くまでやっていたようだった。

一年生に入学したばかりの私は古い下の学校だったし、阿波先生は新しい上の学校にいたのでめったに見ることはなかったが、朝、学校に出かけて来る姿をたまたま見ることがあった。先生は背がわりと低く、温厚そうななかにも、きりつとした感じのする先生であった。いつも中折れシャツポダが、夏になるとカンカン帽をかぶった洋服姿は、なかなか立派に見えた。

この阿波先生が、秋ごろ出張した時かぜにかかったのがもとで、その後、高熱を出して休ん

その二

「アイヌの人たちは、魚を毎日の食物としているので尊ぶのはもつともであるが、その魚（鮭）の皮で作ったケリ（鮭など）の皮で作ったくつ」を履いているのは、もつといたないことではないのか」とアイヌの人に言った。

すると彼は、「和人は米を主食にしているのだから、米を第一に尊ぶのはよくわかるが、和人の履くわらじやぞうり、冬のくつなどはわらで作っ

いたが、病気は腸チブスであった。十一月に入って雪の降り出したころ、阿波先生は急逝されてしまった。

先生の葬儀は、十二月初め禅源寺で盛大に営まれた。私も組からの二、三人と、梅野先生に連れられて葬儀に出席した。お参りに来た人たちが、みんな涙を流して別れを惜しんでいたことを覚えていた。

長兄は、その後も度々「偉い先生、惜しい先生がいなくなつた。夜学に行けなくなつた。」と、寂しそうに言っていた。

ているが、それらはみんな米の茎ではないか。魚の皮で作ったくつを履くことは、和人が米の茎で作ったくつを履くのと同じことではないか、まことにもつともなことである。

「熊をカムイとして尊ぶのに、その肉を食べるのはどうしてなのか」

彼は「頭骨を祭り敬うが、肉を捨てて腐らせるより、食べることを尊いとするからである」と、答えたという。

アイヌの《ことわざ世間ばなし集》から

故郷を想う福井孝平

何かと話題の多かった町長選も終わり、また、静かな町にもどった。

古平にも、鯉のぼりがあちこちに見られる季節になった。私たちの小さいころには、どこの家々でも、菖蒲を軒先に差していた記憶があるが、今は町なかで見かけることもない。

ある時調べてみたら、菖蒲の長剣状の葉に芳香があるため、それが邪気を払うという言い伝えからこんな習慣が生まれたように、たぶん今でも東北地方あ

たりでは、まだこの習慣が続いているものと思われるが？ 消えてゆくもの、忘れられてゆくものへの懐かしさがある。老人の回顧志向か、銭湯であれば菖蒲湯、家庭でもせめて入浴剤でもと思うのだが、もうそんなこだわりもなくなってきた。

近づく節句を思い、こんなことがふと思ひ浮かんだ。

鯉のぼり

孫の数だけ泳がせて

鯉のぼり

ついたる飴も買わされて

海の魔神伝説

婦女禁制の神威岬

— 3 —

寛政十一年（一七九九）幕府は、東蝦夷地を松前藩から取り上げてこれを治め、土地から収益を上げようとしたがなかなかうまくいかなかった。また、男女の移住を奨励したが、移住して来る者も少なく、さらにその後

は西蝦夷地も合わせて治めたが特に改善されたということもなく、依然として神威岬は、婦女通行禁制になっていた。

幕府は、それから二十二年後の文政四年蝦夷地を松前藩に返したが、その時、引継書に次の

のように書かれている。

「東蝦夷地には女は立ち入らなかつたが、幕府が治めるようになってからは家来が在住するようになり、その時、妻子を連れて来る者があつた。このことから番人や稼ぎに来る者も妻子を連れて来るようになった。しかし、西蝦夷地については、クトウ（久遠）よりフルウ（古宇）までは女が行つてもいいが、それより奥地へは以前のように行かせないこと」

松前藩はもちろんこれを守つたが、実際には移住を望む者はほとんど居なかつたので、特別障害になるようなことはなかつた。

ところがその後、ある偶然の出来事から、漁民が妻子を連れて西蝦夷地にどんどん入つて来るようになり、このことが大きな障害となつた。

それは飢饉によるものであつた。天保の飢饉（てんぼうのききん）といえは歴史に残る程の大災厄で、天保三年（一八三二）より同九年（一八三八）にわたり、ただ同五年だけが豊作で、あとの六か年は大凶作という状態であつた。特に東北地方が甚だしく、草の根や木の芽

お詫びと訂正

一 補誌詩碑《魚歌》

鳥跡汀 鳥跡ノ汀ニ

* 拾流木 流木ヲ拾ヒ

焼魚介 魚介ヲ焼イテ

勺濁酒 濁酒ヲ勺ム

濤聲騒 濤聲騒ガシク

波蝕洞 波ハ洞ヲ蝕ス

十口平風土物五叩

標題の下番号は、四十三号

で（九）が正しく、それまでの番号が間違っていました。

お詫びして訂正を致します。

~~~~~

をはじめとし、犬や猫にいたるまで食べられるものはすべて食べ尽し、親子兄弟までが食を争い、続々と餓死するものが出たという。ある記録によると人肉まで食べたのである。

このような状態であつたのでこれまで松前地方に送られて来た米も著しく減つたばかりでなく、米価が大いに上がり生活が困難になつて来たことから、住民の中には妻子を連れて西蝦夷地に移住をする者が多くなつてきた。また、農民などで東北地方から松前地方に渡つて来る者も増えてきたのである。



第 一

# 古平青年会結成

古川 義雄

昭和二十四年五月十日、真夏の太陽が輝く早春の日に新地町から燃え上がった業火で、港町の一部を残し、西部地区は例外なしにキレイさっぱり消え失せてしまった。

当時、「古平推進同志会」があり、壮年幹部の指導の下で、町政さえ動かせるような実力を持っていたが、女性会員はいなかった。

そのころの古平町は、復員して来る人や引揚者、そして縁故を頼ってやって来た人たちで、人口は一万人をあっさり突破していた。

至る所に若い人たちが溢れていたから、戦後の混乱期だったとはいいい、妙に活気があった。「同志会」があったところから、群来村、沖村、鴨居木、沢江村、稲倉石などには、大なり小なり青年団が結成されていたし、「友の会」というような女性だけの会もあった。浜町にも青年団の結成の動きがあったが、で

きた様子はなかった。

戦後間もないころのことであり、大火の痛手はそれぞれ深いものがあつたが、同じスタートラインからみんなで走り出す勢いは、不思議なほど早かった。

焼け跡にバラックみたいな家があるうちに出来上がり、何とか落ち着きを取り戻したころ、少し無理かなあとは思つた

が、何となく若い仲間が集まっていた話し合いを重ね、青年団結成の呼びかけをしてみることにした。

かつての「同志会」の地盤だった地域に手分けしてビラを貼ったところ、新築の漁業組合の会議室から溢れるほどの男女青年が集まって来た。百人を越す入会の申し込みがあり、名称もはじめから全町を呑む気概で、「古平青年会」と決まった。

当日、議長をやらされたついでか私に会長も回ってきてしまい、それが縁で、以後長い期間会長を勤めることになった。

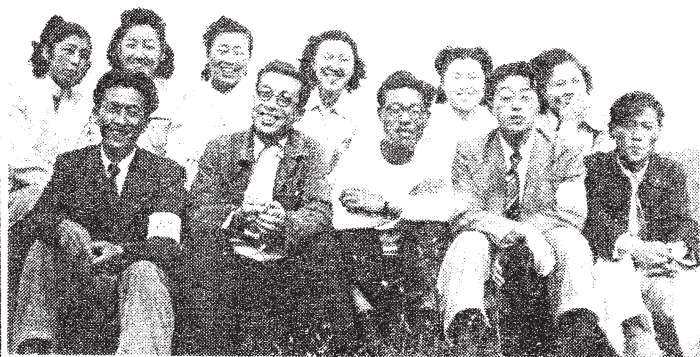
## 石碑を訪ねる

### 開村五十年記念碑

古平は鯉漁に始まり、追いに来ていて、たまたま農耕を始めたということもあつたりして、開拓に入つた人たちの記録はいったて少ない。統計としては記録があるものの、名前などははつきりしていないことが多い。

明治十四年、「青森県出身の工藤末松が、泥の木に入植した」という記録はあるが、どれも断片的でつながりがない。この記念碑は大正十五年（一九二六）に建てられたもので、この年から逆算すると、五十年前は明治十年（一八七七）ということになる。

しかし、それ以前にすでに開拓に入っているという記録があるので、このこと



についてはさらに調べてみたい。おそらくは、泥の木に実際に開拓に入つた人たちが自分たちの記憶によつて、開拓当時の苦労をしのび、その後の繁栄を記念して建てたものであるう。

・場所 熊野神社境内  
・建立年月日 大正十五年

・建立者 泥の木部落会  
・会長 落合雄之丞

# 二十世紀初めの《古平郡》

（古平市街） — 続き —

金融機関はまだととのつていないので、商人の多くは互いに融通しあつて商品の仕入れなどをしてゐる。商人間の金利は月二歩から二歩五厘ぐらいであるが、漁業家へは三歩ぐらいであり、近年は漁がうすいので金融も円滑ではないようである。

## ■製衣造出業

酒造業者は五戸で、醸造高は千九十五石あり、郡内の各地へ供給している。鰯の肝油製造業者は二戸あつて、東京へ移出している。

## ■地 価

市街地は、一坪一円から五円で、畑一反歩で平均十二円、海産干場は一坪五十銭から三円ぐらいで、もし干場に建物がある時は、一坪五円ぐらいという。

## ■木材・薪出欣

木材や薪炭は、余市や石狩から買つてゐる。薪一敷二円五十銭、木炭八貫目（三十さ）一俵四十五銭、トドマツは百石五、六十円ぐらいである。

## ■住 計

住民の多くは漁業に係し、漁業が約七割を占め、商業が二割、農業が一割である。一般に商業者は余裕があり、漁業者は資本に乏しく、農民は生活に余裕がないようである。その生活程度は、漁民が比較的高いよう

である。

## ■人情風俗

住民は一般にぜいたくにながれるようであり、風俗は貧しいようには見えない。公共心にやや欠けるようで、不良じみた行為が見られ、賭博（とばく）、窃盗（せつとう）の犯罪者を出すことが年間三、四件あるといふ。

## ■教 育

浜中尋常高等小学校は、明治九年、官舎を仮校舎にして教育

【今日日はこんな日】

## 強化された消防体制

## 五月は火事に要注意

[昭和24年]

残雪に新緑が鮮やかな行楽の季節になりましたが、五月の空つ風が吹くと、あの大火の苦い思い出を今なお忘れられない人も多いことでしょう。

その後の古平の復興ぶりは目覚ましく、当時の人を驚かせましたが、消防体制も一段と強化されました。

今回、伊藤古平支署長さんからの資料を基にして、昭和二十四年のころと、現在の古平消防団の消防ポンプの放水能力を比較してみました。

初めてガソリンポンプが配置されたのは大正六年で、二千二百円、ポンプ車となると七千円はしました。（古平町長の月給

所にしたものである。のち浜中学校と改称し、明治十三年に校舎を新築し、六百余名の生徒が在学している。

が八十円という時代）

大正時代からの古平町近隣で起きた大火を調べてみますと、

大正三年五月六日  
二百六十六戸 （美国町）

大正八年五月七日  
二百二十四戸 古平町

昭和七年五月二十七日（先勝）  
二百六十九戸 （余市町）

昭和十二年五月十七日（大安）  
七十余棟 （美国町）

昭和二十四年五月十日（仏滅）  
七百二十一戸 古平町

あの大火から四十四年、気持ちを新たに「火の用心」に一層の注意を払いましょう。

▼昭和二十四年

|              |    |
|--------------|----|
| 消防ポンプ車       | 二台 |
| 同（三輪車）       | 一台 |
| ガソリンポンプ      | 二台 |
| 腕用（人力）ポンプ    | 二台 |
| ▼平成五年現在      |    |
| 消防タンク車       | 一台 |
| 同 ポンプ車       | 二台 |
| ポンプ積載車       | 二台 |
| （小型ポンプ計四台積載） |    |
| 連絡車          | 一台 |

6,1001/分  
10,8501/分



昭和24年  
平成 5年